

JSU LANGUAGE SHOOOL

葛 珠慧



はじめに（中国語を取り巻く状況）

2008年12月14日から17日まで、中国の北京にて「第9回世界中国語教育シンポジウム」が開催されました。世界中に中国語ブームが広がる中で、中国語を学ぼうとする人たちに、いかに早く中国語を習得させるかなどをテーマとして話し合う、世界中の中国語教育関係者のためのシンポジウムであり、今回、幸運なことに、私も招待を受け参加する機会を得ました。



シンポジウム会場

世界各国から北京に集まった1,200名余りの参加者は、そのほとんどが、中国語教育の第一線で活躍中の教師や研究者、及び出版社の方々です。シンポジウムには、26カ国から499本の論文と、581件の模範レッスン、各種教材、指導案が寄せられ、それぞれについて、専門家たちによる集中論議が行われました。その結果、63名の参加者に「創造的論文賞」「創造的模範レッスン賞」「創造的教材賞」「創造的指導案賞」の各賞が授与され、受賞者には、更に中国政府より高額の図書券が贈られました。

90年代前後の世界的な日本語ブームの際に、私は日本語国際シンポジウムにも参加したことがありました。しかし、今回の中国語教育シンポジウムは、その参加人数、規模、勢いにおいて、日本語国際シンポジウムなど比べものにならないほど大きなものであり、あ

らためて、中国の大国ぶり
と、「中国語特需」を見せ
つけられた思いがしまし
た。



北京語学研修旅行(2007年)

このシンポジウムは、中国政府が強力に支援していますが、それ以上に強力に支援しているのが「孔子学院」です。「孔子学院」とは、中国政府が、中国文化や中国語などの教育及び伝播のために海外に設

立した語学教育機関ですが、イギリスの「ブリティッシュカウンシル」や、日本の「国際交流基金日本語センター」等のような、各国政府がそれぞれ独自で行っている語学教育機関とは異なり、中国政府が各国の大学など、現地の教育機関と提携し、各国の大学の中で運営されている施設なのです。

この「孔子学院」は、2005年には世界中に26校しか有りませんでした。そこで、中国政府の中国教育省主管「中国国家对外汉语教学领导小组」は「今後5年間で、孔子学院を100校に増やす」という目標を立て、行動を起こしました。その後、2008年末の統計によると、「孔子学院」はこの3年で、すでに78カ国の地域で、目標の倍以上の250校にまで増え、更に56カ所の「孔子教室」を加えれば、300校を超えました。

この未曾有の「漢語熱」（中国語ブーム）の中、世界中で教員、教材、教育方法がその需要に追いつかないという「三教問題」が発生し、中国政府は、この「嬉しい悩み」に頭を抱えることになりました。今回のシンポジウムは、まさにこれらの問題の解決をメインテーマに掲げて開催され、各賞もこれらの問題解決への貢献を表彰するため設けられたのです。

また、今回のシンポジウムでは、中国語能力の評価法、中国語教育能力の評価法などもテーマとして取り上げられました。前者としては唯一「HSK（漢語水平考試）」のみが実施されており、後者としては未だに正式な試験と呼べるものがない、という現在の状況では、まだまだ、健全な中国語の学習と教育の環境が整っている、とは言えないでしょう。

1) 語学学習は最も有効な自己啓発手段

2008年9月、アメリカの株価暴落に端を発した百年に一度と言われる未曾有の金融危機は、全世界に広がり、既に半年以上たった現在も、いつ終わるのか予測がつきません。どんな金融商品に投資しても損失しか見込めない今、自己啓発への投資こそが、数少ない、利益を見込める投資となり得るのではないのでしょうか。

確かに、自己啓発の手段として、会計士、弁護士、税理士などをはじめとする様々な資格の取得が効果的な場合もあるでしょう。

しかしこの容赦のないリストラが行われている世界的な不景気の中、果たしてその資格で、あなたが望む仕事は得られるか、あなたが望んでいる職種でその資格は活用できるのか、その資格は本当に有効なのかを問われるような事態に直面することは少なくないでしょう。

そんな中で、最も汎用性が高いスキルが「語学」なのです。言葉の学習は、どこでも、だれでもゼロから始められ、短い期間でもある程度の効果は現れますし、長く続けることで、また実際に使用することで、更なるスキルアップが見込めます。このスキルは、仕事の上でも日常生活の中でもきっとあなたの可能性を大きく広げてくれるでしょう。外国語習得への投資は、この金融危機を乗り切るきっかけに、あるいは、金融危機後の社会での



第3回中国語弁論大会(2008年)－中級の部

更なる飛躍につながるに違いありません。

2) なぜ中国語なのか、なぜシンガポールで中国語なのか

英語さえ話せれば世界中どの国でもビジネスができる、と思っている人は多いようです。確かに英語は世界で最も多くの人が使っている言語かもしれませんが、しかし、実際、日本と関係の深い中国、香港、マカオ、東南アジアのいくつかの国では、中国語ができなければ、「寸歩難行」(少しも動きが取れない)ということがいくらかでもあるのです。世界の四分の一の人々が使う中国のことばを身につければ、それこそ日本と関係の深い周辺のどの国でも自由自在にビジネスができる、とすることができます。

また、世界的な金融危機の今も、中国だけは「内需拡大」で、まだまだ仕事がたくさんあります。私自身、年に数回中国に行っていますが、行く度に中国の勢いを感じます。実際、最近中国で行ったアンケートでは、「中国には金融危機の影響はない、感じない」と答えた人の数が、予想以上に多い、という結果がでたそうです。

一方、シンガポールで使われている中国語は、北京で使われている中国語ほど厳格ではないため、日本人にも比較的聞き取りやすいと言えるでしょう。また、シンガポール人は外国人が話すブロークンな中国語にも寛容なため、習いたての中国語を話しても通じやすく、初中級の学習者にとってはとても良い学習環境です。さらに、シンガポールでは、東南アジアで唯一、日本中国語検定協会が実施している中国語検定を受検することができます(会場：JSU星日外語学院)。

覚えたての中国語を気軽に使って話してみることも、しっかり学習して身に付けた中国語の能力、レベルをきちんと確認することもできるシンガポールは、中国語の勉強を始めるのにぴったりの国なのではないでしょうか。

3) 言葉は何より大きな記念品

日本への本帰国が目前となったときに、シンガポール生活の記念として、あなたは何を日本に持って帰りたいと考えるでしょう。その時になって「ぺらぺらの外国語会話能力」をもって帰ることが出来たら、と考える人は多いのではないのでしょうか。

日本に住んでいる多くの日本人が、海外生活経験者は、“当然”、生活していた国の言葉はぺらぺらと話せる、と思っています。一生懸命に勉強して、必死の努力でやっと話せるようになった外国語なのに、周りの人たちからは「海外に住んでいたのだからあたりまえ」と思われてしまうことも多々あります。逆に何も話すことができなければ、「〇年も海外にいて、言葉さえ話せないなんて、一体何をしていたのか」、と笑われ、悔しい思いをすることだってあるでしょう。

それでもやはり、そして、それだからこそ、皆さんには、是非、シンガポールにいる間、語学学習に積極的に取り組んでいただきたいと思います。せっかくシンガポールで生活する機会を得たのですから、このチャンスを生かし、シンガポール生活の大きな記念品として、習得した出来るだけたくさんの外国語を日本に持ち帰ってもらいたいと思うのです。持ち帰った記念品(外国語)は、まさに一生の記念、一生の宝物になるでしょう。

また、覚えた言葉は使い続けることが非常に大切ですので、帰国後も、持ち帰った言葉の学習を継続することをお勧めします。実際、日本に帰国した後も大勢の方が、会話能力の維持、向上、発音矯正、中国語検定対策、大学受験対策など、様々な目的で中国語学習を継続していらっしゃいます（JSU星日外語学院では、日本に東京銀座校を開設し、帰国後も学習を継続したいと希望する生徒さんのためのアフターサービスを提供しています）。

4) 中国語は日本人にとって勉強しやすい言語

まず第一に、日本人は漢字を使います。「経済」、「家庭」など、中国語の単語の七割ほどが、日本語と同じなのですから、全く中国語を習ったことが無い人でも、簡単な筆談で話が通じた、新聞の見出しが理解出来た、という経験があるのではないのでしょうか。そこに、ほんの少し「中国語の文法の基礎」をプラスするだけで、理解できる中国語は格段に増えるのです。ですから、日本人にとって、中国語は、「事半功倍」（半分の労力で倍の成果が得られる）で習得できる、習いやすい言葉と言えるでしょう。

また、日本と中国は、文化的にも多くの共通点があります。「遠慮」、「謙遜」などは、その代表的なものです。例えば、人に「よかったら、召し上がってください」とお菓子などを勧められたとき、日本人は、まず最初に「いえいえ結構です」と遠慮することが多いですが、中国人も同様に、「不要、不要（結構です、要りません）」と一旦遠慮して断ります。また、人に自分のことを褒められたとき、日本人は「そんなことはないですよ」「いや、おはずかしい」などと謙遜するのが常ですが、同じように中国語でも「哪里那里（いえいえ）」「没什么（そんなことないですよ）」と言って謙遜するのです。

このように、中国語には、日本人の微妙な感覚をそのまま表現できる言葉がたくさんあり、表現方法や言い回しなども、日本語と共通する部分が少なくありません。そのため、中国語は、日本人にとって、感覚的にとても理解しやすい言語だと言えるでしょう。

ただし、発音だけは別です。日本語とは全く違うものですから、これだけは、基礎からきっちりと勉強しなければなりません。

5) シンガポールの中国語への取り組み

シンガポールにお住まいの皆様は既に、仕事上でも、日常生活においても、一つの言語が使えるだけでは不十分だ（物足りない）、と感じておられるのではないのでしょうか。多民族国家であるシンガポールでは、早くからバイリンガル政策がとられており、二つ以上の言葉話せる人が少なくありません。首相をはじめとする政府高官は、少なくとも二つ以上の言語を使ってスピーチをします。また、お医者さん、弁護士さん、ビジネスマンは、更に積極的により多くの言葉を覚えて使っています。

バイリンガル政策の一つとして、シンガポールでは、毎年、「標準華語を話そう」と題した華語普及キャンペーンが行われています（シンガポールでは中国語を「華語」といいます）。1979年に始まり、今年で30周年を迎えたこのキャンペーン、開始当初のスローガンは「多講華語、少説方言（方言をやめて、標準華語を話そう）」でした。当時、シンガポールの華人社会は、それぞれの方言を話す人たちがそれぞれのコミュニティに分かれて生活

し、異なるコミュニティ間では意思の疎通さえも難しい、という状態にありました。そこで政府は、「標準華語」という誰もが同じように使える共通語を設け、全ての華人にこの共通語の使用を推奨するという政策を打ち出し、全ての華人に共通の帰属意識をもたせようとしたのです。

一方で政府は、この30年間、英語による教育を原則とした英語第一主義の言語政策を実行してきたため、華人を含めた全国民が、自分の民族の言葉を話すことができなくなり、英語のみが「実質的な国語」になってしまいました。ある国際機関の調査結果によると、シンガポールの5歳から14歳までの華人児童のうち、家庭での会話に英語を用いている児童の割合は、36%にもものほるそうです。最新のデータでも、家庭で英語を話す小学一年生の割合は毎年2%ずつ増えているとのこと。その結果、つい最近、「学校での母語授業は英語で教えるべきなのか」という議論がマスコミや華人社会を騒がせていました。

華語普及キャンペーンでは、毎年、「華語を使う幸せを失いたくない」、「華語がしゃべればクール」などのテーマを決めて、特に若者に向けて標準中国語の使用を呼びかけています。今年のテーマは「华文？谁怕谁（中国語？恐くない）」に決まり、すでに今年もキャンペーン活動は始まっています。

今年3月17日、上級相のリー・クアンユー氏は「家长应跟孩子讲华语（親は子供に華語で話すべきだ）」のスピーチの中で「標準中国語は、中国大陸の13億の中国人全てに通じる。…中略…家庭で中国語を学び、学校で英語を学ぶことにより、英語と中国語両方の言語を使えるようになった子供たちには、前途洋々たる未来が開けるだろう。」と語り、中国語を含むバイリンガルの“実用的な価値”を強調しました。

6) 中国文学をビジネスに活かす

中国語の学習がある程度進んでくると、「三国志演義」、「孫子兵法三十六計」等の有名な中国文学を、中国語で読めるようになってきます。これらの中国文学の中には、ビジネス上や日常生活の中で活用できる教訓や実際的な方法がたくさん含まれています。

例えば、2000年に、シンガポールマクドナルドは、日本のサンリオと提携し、マクドナルド店舗内での限定版ハローキティの販売事業を行いました。まず最初の週に発売されたのは中国人顔のキティちゃんセット（男女一組）、1セットが42シンガポールドルだったと記憶しています。「限定」を強調した発売前のコマーシャルが功を奏し、「早く行かなければ買いそびれてしまう」と飢餓感をあおられた全島中の購買者たちが、朝8時の発売開始を前に、前日から徹夜で行列を作りました。その後6週間にわたって、毎週異なる顔の計6種類のキティちゃん人形が登場しましたが、これらを全て揃えるために、その後も毎週多くの人が徹夜で行列を作ったのです。当時シンガポール国立大学で教鞭を執っていた私は、突然多くの学生が授業中に居眠りするようになったのを不思議に思い、尋ねてみたところ、キティちゃんのための徹夜だった、というわけです。当時それは若者達のファッションの一つになっており、学生達の間では、挨拶代わりに「買えた?」、「何個目?」という会話が飛び交っていました。日本でも、タマゴッチで同じような現象が起こっていた時期がありましたね。実はこの販売戦略は、三十六計の中の第三十二計「空城計」を応用しているのです。

それ以外にも、化粧品会社が美人のモデルさんを使って広告を出すのは、第三十一計「美人計」の応用、大金を掛けて開発・宣伝した商品が思うように売れないときに、原価割れを覚悟で、一時だけ安売りをして販路を拡大するのは、第三十四計「苦肉計」の応用といえることができるでしょう。

JSUで6年間にわたって中国語の勉強を続けておられる三宅信行氏は、現在、毎週2時間、中国語版「三国志演義」の勉強をしておられ、「ある程度中国語をマスターしたので、その中国語力を使って中国語の原作本の読破に挑戦しています。日本語に翻訳されたものは著者の意図したものと違って訳されるケースがあるので、原書を読むことでより著者の真髓を知ろうとしています。中国古典文学の勉強は中国語能力のレベルアップにつながるだけでなく、現代社会にも通用する知恵が身につくという効果もあると思います。中国語は非常に表現力に富んでおり、また日本語にはない中国独特の表現、描写と出会うことがあります。新たな言葉との出会いが沢山あり毎週の授業を楽しみにしています。」とおっしゃっています。

三国志演義以外にも、中国文学には、「紅樓夢」、「西遊記」、「水滸伝」など、たくさんのお名作があります。ぜひ、中国語を学んで、これらの原作に挑戦し、中国文学の真髓を味わい、ビジネスに活用してみてください。

最後に

先日、上海に行った際、来年開催される上海万博のちょうど365日前という日にあたり、市内で催されていたカウントダウンイベントを見る機会がありました。そこで、イベントに参加していた日本人、韓国人、欧米人など各国の人々がみんな、標準中国語を使って挨拶をしている光景を目の当たりにし、私はびっくりしてしまいました。以前は、外国人の挨拶といえば通訳付きが当たり前でしたが、そんな風景は、今やすっかり過去のものです。

近年、中国のめざましい経済発展に伴い、世界の各地で中国語の一大ブームが巻き起こっています。近頃イギリスの小学校にも中国語のクラスができたこと、英国BBC放送は報じていますし、ロシアのプーチン首相のお嬢さんは二人とも中国語を習っているそうです。また、アメリカの有名な投資家ジム・ロジャーズ氏は、投資家の視点から中国の将来性を非常に大きく評価しており、彼にとって最も重要な投資対象とも言える彼自身の子供たちに中国語を身につけさせるために、現在、シンガポールに移住し、今後12年間に渡って子供たちに中国語の学習をさせる計画を実行中です。

更に、この5月には、アメリカの議会に「中国



第3回中国語弁論大会(2008年) - 審査員と出場者

語学習法案」が提出されました。この法案は、アメリカ人が中国語を学習して身につけることによって「中国における米国の影響力を強め、世界中でアメリカの競争力を高める」ことを目的としているそうです。これは、アメリカが現在、いかに中国を、特に中国経済を重要視しているかを物語るものでしょう。

この中国語人気は、中国経済の成長にあわせて、今後もますます拡大することでしょう。皆さんも是非この「中国語ブーム」の流れに乗って中国語をマスターし、自由自在に世界中を飛び回りましょう。

執筆者氏名

葛 珠慧(ガー チューホイ)

経 歴

上海出身。

1981年、上海外国語大学卒業。元中国中央電視台(CCTV)国際部キャスター。

1989年来星後、シンガポール国立大学(NUS)日本語研究学科にて非常勤講師をつとめる。

2001年にJSU星日外国語学院を創立。

FM96.3「JSUでニーメンハオ!」の番組講師。世界漢語学会会員。